

博物館のあり方に関する基本的な考え方

検討資料

1 はじめに

経緯

- ・ 昭和 28 年に県立の総合博物館として開館。
- ・ 平成 4 ～ 9 年度にかけて「センター博物館」計画が進められたがハコモノ整備凍結により白紙になる。以後何度かの整備検討が行われたが財政的な事情により挫折。
- ・ 平成 16 年度末に建物建設の当面見送りと暫定整備（現博物館の改修と移動展示の先行実施）の方針となったが、改修に多額の経費が必要なが判明。整備内容の再検討中に野呂知事の選挙公約を公表。
- ・ 平成 19 年度三重県文化審議会において文化振興政策の中で、博物館のあり方を検討することになった。

いまなぜ三重の博物館か

- ・ 今の博物館の状況では、県立の博物館の役割を果たすことができない。
- ・ 生活上のニーズと文化的な必要性は同じレベルで計れない。三重県の将来像への明確な意思とビジョンを持ち、後世に対する責任を自覚した政策判断が必要。
- ・ 美しい自然と多様な文化をもった三重県のアイデンティティを明確にするためには、三重のリソースを「ストック」し、それを提示・紹介する「フロー」という二つの技術を備えた県立の総合博物館を整備することが戦略的に必要不可欠である。

《第 1 回部会 委員意見》

- ・ 今の博物館を見たら、博物館を今つくらなければいけないことは誰でも理解できる。
- ・ 新博物館が必要だという思いは、博物館の現状を見た全員一緒だと思う。今きちんと収蔵しないと、今あるものも失われてしまう。
- ・ 県の財政は依然厳しい状況であるが、現在の県立博物館のままではいけない。倉庫管理をしっかりとやっている企業（そうした企業を活用したり、そのノウハウを取り入れるなど）があるという議論もあるが、新博物館はぜひ建てるべきである。
- ・ 1 万人アンケートでは文化や博物館に対する県民ニーズが低いとの結果が出ているが、生活に直結したものと文化的なものは本来同じレベルで語れるものではない。

- ・ 博物館が必要かどうかは、政治的決断しかない。大衆的議論では、必要性和満足度の議論の中で埋没し、文化施設は破滅する。為政者の政治的決断の責任は重く、後世に責任をとることになる。三重県のアイデンティティを明確にするには、戦略的拠点施設は絶対に必要であり、将来的にどんな県にするのかという明確な意思とビジョンが示されなければならない。アイデンティティを輝かせるためには、リソース、材料をストックし、それを提示し紹介し、学習拠点に出していくフロー化が必要。博物館は、ストックとフローの二つの技術を備えなければならない。またビジョンとリソースがあっても、外部評価がなければアイデンティティは輝かない。県民がどんなに喜んでいても、県以外の人たちにそれが評価されることが本当のアイデンティティである。三重県ほどの美しい県、しかも個性連邦ともいべきこの県が総合博物館を持たないというのは、戦略的には大欠陥といわざるをえない。このまま放置していたのではだめである。

《櫻井委員の意見書から》

- ・ 現在の県立博物館の収蔵・展示場では、これまでに収集された多数の資料、寄贈された資料などを知り、それを通して学ぶ機会を私たちは失っている状態である。特に収蔵に関しては、限界に来ていると見てよい。この点で早急に収蔵への方策を施すべきであるが、既存の建物等の利用ということでは、博物館事業の展開の上で、また将来的に収蔵資料の価値を落としかねない危険を覚える。モノを扱う上での基本的な収蔵の観点より最初からその目的を持った施設として構築することがふさわしいと考える。

2 文化振興拠点としての博物館（設置の理念・目的）

拠点部会の検討結果の活用（ただのハコモノに終わらせない県民が育てる博物館）

- ・ 文化振興拠点としての県立博物館とは
地域の歴史、自然、文化に関するモノ資料を通じ、過去、現在の自然、暮らしや文化を知ること、自分や地域の今を振り返り、未来に向けて考察する拠点。
- ・ 文化振興拠点としての県立博物館には、以下の役割が求められる。
県民一人ひとりの成長と自己実現のための多様な支援の役割。
地域のアイデンティティ（個性）が明確になり、一人ひとりのもつ力が地域に還元されることで地域の潜在的な力（ポテンシャル、可能性）と魅力を高める役割。
文化振興拠点としての博物館活動を担うことができる人材育成のための中核施設的な役割。

《拠点部会 委員意見》

- ・ 広範な県域の中央拠点としての機能を果たすべく、博物館がもつべき機能を

備えた三重県型の博物(館)システムを考えることができないか。

- ・ 県外の人にアピールできるようなインパクトのあるアイデアが必要
- ・ 例えば、大学で生物に関係する研究を学部の壁をなくして、機能的に連携、統合するといったことと同様に、本を読みたい、 したい、といった文化に関するニーズに対して、それを統合する頭脳としての役割を果たす機能を博物館にもたせることはできないか。この場合に、図書館や美術館の機能を統合する組織としての博物館的な発想はできないか。(この場合に、名前も変える必要があるかも知れない。)
- ・ (統合機能をもたせるという意見に対し) もっともな面もあるが、全体をカバーするのはいかなものか。それぞれの特徴をわかりやすくしてニーズにこたえる連携をしたほうがいいのではないか。資料のあり方から整理ができないか。
- ・ 図書館、美術館と違って博物館が担うのは地域。他の拠点よりは地域との関わりを意識すべき。
- ・ 拠点としての博物館は、1つの建物を意味するのではなく、将来に向けて文化を高める博物館のような機能を果たすものを検討する。場合によっては、博物館で完結することにこだわらない議論をしてみてもいいか。
- ・ 博物館法にしばられない博物館、という考え方があるのではないか。
- ・ 新しいものをめざすなかでは、「博物館」という言葉を名称として使わなくてもよいのではないか。
- ・ 登録博物館になるかならないかは、大きな問題。(なる場合には、条件が設定される。)
- ・ 学芸員の資質が公立博物館においても大きな問題であり、このこととあわせて、PFI、指定管理といった問題について考えていく必要がある。
- ・ 県立博物館は、県内博物館の学芸員の資質を高める研修の場としての役割がある。
- ・ 博物館は、学校教育にとって、実物に触れ、体験するような意味を含めて重要な場所である。

《速水委員の意見書から》

- ・ 博物館を、収蔵、展示、研究、未来への提示と4つに機能を分けると、ハード、ソフトが中心で、そのバランスが重要である。ハードは収蔵に特化して、設備の整った収蔵倉庫を建築し、展示は一部簡素にしたものを併設する。展示は現県立博物館のリニューアル・収蔵に使われている部分などを改築するなどする。また各地の展示施設と協力しサテライト展示場として機能してもらおう。研究は収蔵庫に併設した研究所を中心に行い、未来への提示はこの研究所を中心に展示企画なども行う。
- ・ 三重県には先進的な倉庫業を営む企業もありそのロジスティクスのノウハウを利用し、世界に例を見ない先進的な収蔵システムを構築する。三重県のノウハウとして将来は世界の収蔵と展示施設の企画に生きてくる。

《河俣委員の意見書から》

- ・ 文化活動がどうあるべきか、方向性を決めれば、必要な拠点(施設等の場所)・人が定まり、それにより文化活動が活性化し、拠点も充実するのではないか。県の施設同士を有機的に結びつけることのみを考えるのではなく、市町ともう

まく連携し、支援をし、眠っている施設を活性化させたい。

- ・ 展示スペース等に関しては慎重に考えるべき。財源との折り合いのつく規模を考えていくべき。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 博物館には博物館としての役割がある。博物館にすべて文化振興を特化して議論すべきではない。さまざまな文化振興拠点の中で、博物館の位置付けを考えるべきである。
- ・ 拠点には、博物館だけではなく、いろいろな拠点にとって指導的役割をはたす人材育成の機能、また人材育成を通じて、市町や関係施設との関係をリードしていく、ネットワークを構築していく機能がある。

《櫻井委員の意見書から》

- ・ 新博物館は、三重県における文化振興の拠点形成の一つの柱として、十分な内容をもって整備をしておく必要がある。三重県の歴史、文化を知り、学びぶとともに三重県「愛」をはぐくむ空間であり、学術的な面でしっかり支えられた情報発信の場としての役割を担うべきであり、その環境を人的にも整えることへの投資は惜しんではならない。この点では、イベント会場という性格で捉えることには疑問がある。

県民の、特に地域に立脚した知の拠点

- ・ 博物館と他の文化振興拠点との違いは、地域との関わりが強いことであり、地域の文化を次の世代に継承するための拠点となる必要がある。
- ・ 生涯学習の拠点の一つとして、県民一人ひとりが自主的な活動と自己実現を果たす場となるとともに、相互の交流を通して、みえけん愛・地域愛を育む場となる。
- ・ 地域の履歴を記憶する装置として、地域の過去、現在をあらわし、地域づくりや地域課題解決などを支援するとともに、未来にむけた、他地域・世界に向けた地域アイデンティティの明確化・発信の場となる。
- ・ 地域の経済や観光の活性化など地域の振興に幅広く貢献する。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 博物館に必要なのは地域の文化を次の世代に継承することである。
- ・ 博物館構想に、地域の文化振興や経済の活性化に役立ったり、観光の活性化に貢献できるような考え方を最初から取り込んでおけば、県民の総意が得られる可能性が非常に高いのではないか。

市町や民間の文化振興拠点との役割分担と連携

- ・ 三重の文化振興を担うパートナーとして市町や民間の文化振興拠点とのネットワークを構築する。
- ・ 県立の博物館でなければできないことを明確化し、市町や民間の文化振興拠点との有機的な役割分担を行う。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 拠点には、博物館だけではなく、いろいろな拠点にとって指導的役割をはたす人材育成の機能、また人材育成を通じて、市町や関係施設との関係をリードしていく、ネットワークを構築していく機能がある。
- ・ 市町村の博物館等とのネットワークも、こちらに高度な機能や研究実績、技術がなければならない。頼られる博物館、手を結びたいと思われるような博物館を目指すべきである。

3 基本的な性格

総合博物館

- ・ 自然と歴史文化は別個に存在するものではなく、人々の生活の中で密接に関わっているものであり、三重を知るためには生活を総合的に捉える視点が重要である。
- ・ 実際の生活の中では自然も人文も一体になっており、総合的にものを見て、次に伝えていくことが大切であることから、自然系・人文系のどちらにも特化しない総合博物館とする。
- ・ 県立博物館は、三重の来し方行く末を総合的に扱う博物館として、展示のみならず、収集収蔵や調査研究なども含めた博物館活動全体において、人文系や自然系の別にとられない総合的な活動を行うものとする。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 博物館に必要なのは地域の文化を次の世代に継承することである。
- ・ 人文系か自然系かという話しあるが、たとえ自然系にしたとしても、自然の背景、文化の背景、環境なども一緒に総合的に取り扱う必要がある。固定的な通史を紹介するだけでなく、展示替えが容易にできる総合的な展示にする必要がある。
- ・ 県立博物館は県の広域中枢施設であるのだから、今はまず総合博物館を目指すべき。
- ・ 総合博物館かどうかについていうと、実際の生活の中では自然も人文も一体になっているのであるから、総合的にものを見て、次に伝えていくことが大

切である。

《櫻井委員の意見書から》

- ・ 博物館の性格については、単一の性格ではなく、現在の収藏品や今後のことを見ずると歴史・文化・自然の領域を主とした総合博物館が妥当で、将来的にそれが発展・展開することは、今後の博物館活動や県民がそれをいかに活用するかにかかっているかによると思う。

地域の多様性を考慮した博物館

- ・ 三重県の特性は多様な地域性にあることから、県立博物館は、それぞれの地域性を活かしながら、それらを総合的にカバーして捉える視点が必要である。
- ・ 県立博物館は、地域の多様性を背景にしたさまざまな性格をもつ県内の博物館施設を有機的に結びつける中核的な施設としての博物館活動を行うことにより、県内の博物館がそれぞれの独自性とその魅力を発揮させ、それらが集まった総体が「みえの博物館」として機能するための先導的な役割を担う。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 県内の4つの地域の特徴をカバーするのは県立博物館の役割だと思う。そのためには人材が必要である。

各機能が有機的に連動した博物館

- ・ 県立博物館では、資料を確実に次代に伝える収蔵機能だけでなく、県民が博物館をさまざまなかたちで活用し、博物館活動に主体的に参画できる機能を両立させた活動を行うものとする。
- ・ 県立博物館が、県内の博物館ネットワークの中で中核的な役割を果たすためには、収集収蔵から調査研究、展示、普及などにわたるすべての博物館活動を有機的に結合させたノウハウをもつ必要がある。それにより、人材育成や技術支援などの機能も有効に発揮させるものとする。
- ・ 公文書館機能の対象となる資料は、博物館資料の内容とも重なる歴史資料であり、併設や一体化など、両者の機能が効果的に発揮できるあり方を検討する。

《第1回部会 委員意見》

- ・ これからの博物館には、歴史遺産をきちんと保存できる収蔵機能とアクティブな文化拠点としての両方の機能が求められている。収蔵は非常に大切であるが、そのような地道な活動だけがしっかりとしていれば、県民にとって本当によいかということそうではないであろう。県民が、新しい発見をしたり、つながったり、具体的な行動ができるようなアクティブな機能も求められて

いる。現実的にはアクティブな機能と、土台としての収蔵の両方をうまく結び付けることが求められているのではないか。

- ・ 博物館のあるべき姿について、美術館・博物館は、インスティテュートであり、単なるファシリティ、施設ではない。研究機能・収蔵技術、学芸員や専門の研究者が多くいてこそ輝く施設であり、人的資源・技術的資源と一体化したものであるということをもっと明確にする必要がある。

誰もが自由に利用・参画し、楽しめながら学べる博物館

- ・ 子どもからおとなまで、世代を超えて楽しみながら学べる博物館とする。
- ・ 障がい者や外国人など、誰もが楽しみながら学ぶことができるユニバーサルミュージアムを目指す。
- ・ 県民一人ひとりが自己実現できる場となり、相互に交流しながら、博物館活動に主体的に参画できる博物館とする。

4 博物館に求められる機能

博物館の基本的な機能（タテ系の機能）

収集・収蔵機能

- ・ 現県立博物館の収蔵環境では、資料が劣化する危険性が高い状況にあり、まず 28 万点の館蔵資料を安全かつ効率的に保存できる収蔵環境の確保が第一の課題である。
- ・ 三重の自然・歴史文化の資産が失われる危機にある昨今の動向に対して、全県的な見地から県立博物館としての資料の収集・収蔵の方針を定めて、地元保存主義を原則とした県内の博物館施設等との役割分担の体制を構築し、収集・収蔵活動を行う。
- ・ 県内の博物館の内容や所蔵資料のデータベースを構築し、県内の資料収蔵ネットワークを整備する。
- ・ 将来的な収蔵庫の増設計画を構想段階から盛り込むことを検討する。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 今きちんと収蔵しないと、今あるものも失われてしまう。三重県の博物館が、今ここにある博物館のままで今まで継続してきたこと自体を本来は恥じなければいけないのではないかと。博物館にとって収蔵がまず大事なことである。
- ・ モノはそのままでは何もいわない。そこからどれだけ情報を引き出すかが博物館の一番大事な機能ではないか。放っておくと、モノはゴミになる。博物館では、モノをきちんとならべて、そこから情報を引き出す体系をつくって

いくことが大切である。

- ・ 現在の県立博物館の収蔵環境では資料が泣いているのではないかと思う。次の世代に文化を伝えていくのが我々の務めである。
- ・ モノを扱う場合、入れっぱなしではダメである。モノは生きている。魂の入ったハコモノ、中身の詰まったハコモノをつくる必要がある。
- ・ 現状からみれば、県立博物館はかなり力を入れてきちんと（施設の整備を）すべき。モノが持っている情報を調べて引き出ししていくことが大事であり、単に置いてあるだけではダメである。
- ・ 効率的な収蔵を行うことが大事である。三重県の長い立地を考えた場合、収蔵品をうまく活用する方法として、学校の空き教室の活用などによるサテライト展示などを考えるべきである。
- ・ 収蔵庫はどんどん膨れていく。増殖できる博物館、成長する博物館というコンセプトを先に打ち出すべきである。
- ・ 県立博物館は収蔵機能を持たない博物館としてスタートした。以来、さまざまなモノの寄贈を受けてきた。現在の県立博物館の施設では、博物館としての十分な役割を果たせない。新しい博物館を建ててほしいというのが県立博物館の長年の念願である。

《櫻井委員の意見書から》

- ・ 収蔵品に関しては、生活文化に関する資料についても大切にしてもらいたい。

調査・研究機能

- ・ 学芸員の人員を確保し、博物館独自の研究機能を十分に保持・向上させることができるようにする。
- ・ 他機関（博物館・大学等）との共同研究や、外部の研究者に客員研究員・協力研究員などになってもらい博物館の調査・研究活動に参画してもらうなどして、調査・研究機能を活発化し、地域課題の解決や地域振興に役立つシンクタンク的な機能をはたす。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 博物館が独自に研究できる部分をきちんと持つておくことも必要である。

展示・情報発信機能

- ・ 県立博物館における展示機能とはどのようにあるべきかについて検討したうえで、大規模で固定的な常設展示エリアと展覧会等を開催する企画展示エリアからなる従来の博物館展示の関係の見直しを行う。
- ・ 従来常設展示と位置付けられてきた展示エリアについて、固定的な展示ではなく、展示替えが容易にできる仕組みとするなどの工夫を行う。

- ・ 館内の展示だけでなく、県内の博物館施設等と連携した館外展示などを行う。
- ・ 博物館活動を通じて、「三重県」を内外に発信していく。
- ・ 展示活動と併せて、館蔵資料をはじめ、博物館のもつさまざまな情報を、県内はもとより広く全国に発信する。

閲覧・レファレンス機能

- ・ これまでの博物館では、展示機能が博物館資料の活用を中心であったが、資料の閲覧やレファレンスの機能を展示機能と並ぶ重要な機能として位置付けることにより、知の拠点として、県民が博物館資料を活用できる幅を広げる。
- ・ 公文書館の収蔵資料は、歴史資料として選別された公文書と古文書などであり、歴史資料を残すという役割でいえば、博物館と機能的に共通するものであることから、そのあり方について、博物館との一体的な整備について検討する。
- ・ 公文書館機能の他にも、閲覧・レファレンス機能の近接領域である図書館や生涯学習センターなどの文化振興拠点施設との効率的・効果的な連携のあり方も検討する。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 人文系か自然系かという話しがあるが、たとえ自然系にしたとしても、自然の背景、文化の背景、環境なども一緒に総合的に取り扱う必要がある。固定的な通史を紹介するだけでなく、展示替えが容易にできる総合的な展示にする必要がある。
- ・ 県民が実際に収蔵品を見ることができ、子どもたちが未来に夢が描けるような博物館が必要だと思う。
- ・ これから目指すべき新しい博物館は、きちんとした収蔵に裏打ちされたモノを、ビビッドな提示の仕方で問いかけ、受け止められるものであるべきだ。
- ・ 効率的な収蔵を行うことが大事である。三重県の長い立地を考えた場合、収蔵品をうまく活用する方法として、学校の空き教室の活用などによるサテライト展示などを考えるべきである。
- ・ 美術館は作品を鑑賞してもらおうところであるが、博物館で派手な企画展示をしようとする、数千万円規模のお金がかかってしまう。県の目指す博物館はそのようなものではないであろう。
- ・ 公文書館については、併設かどうかの議論はあろうが、この機会に十分に整えていくべきであろう。
- ・ 公文書館を併設するならば、総合文化センターゾーンに置くべき。例えば図書館との連携、生涯学習との連携などと一体化して考えた方が効果的であり効率的ではないか

《櫻井委員の意見書から》

- ・ 公文書の扱いについては、古文書だけでなく、近現代の資料も将来の資産として蓄積して行く必要がある。資料の収蔵という点で、博物館と公文書館とは機能的に共通するところがあり、この機会に一体的に捉えてそのあり方を考えるべきではないか。

地域・人との交流機能（ヨコ系の機能）

学習支援機能

- ・ 誰もが気軽に立ち寄り、交流する中で、楽しく学ぶことができる博物館とする。
- ・ 県民の自己実現を支援する生涯学習の拠点の一つとして、博物館活動に則した多様な学習機会を提供する。とりわけ、モノ資料を素材とした学習活動など、博物館にしかできないプログラムを積極的に実践する。
- ・ 学校教育との連携を密にし、遠足・社会見学、出前授業などの学校教育活動に対して、学校の学習課程に十分に対応した支援活動を行う。
- ・ 子どもたちが、三重の自然・歴史文化に対する興味や関心を深められるような博物館活動を行い、三重の将来を担う子どもたちの育成に寄与する。

県民参画機能

- ・ 収集収蔵、調査研究、展示などの博物館活動に対して、県民の参画を得ながら、県民とともに作る博物館を実現する。
- ・ 県民にも、博物館の運営方針の決定や活動の評価への参画をしてもらい、県民とともに成長する博物館を目指す。

アウトリーチ機能

- ・ 博物館内だけに博物館活動を限定させずに、県内全域をフィールドとした活動を展開する。
- ・ そのために、県内各地の博物館等の文化振興拠点施設や地域の諸団体・県民などと連携・協働して、地域資料の収集・調査活動や館外展示などのアウトリーチ活動を行う。

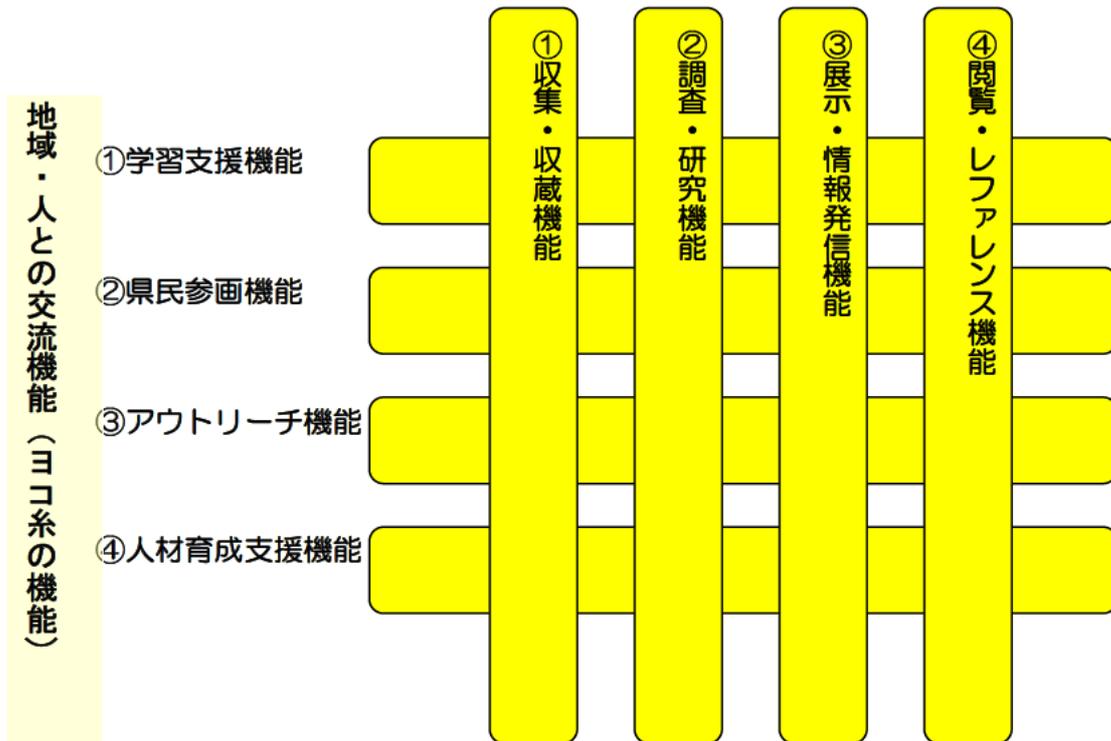
人材育成支援機能

- ・ 自館の人材育成だけでなく、県内の博物館をはじめとした文化振興拠点施設とのパートナーシップに基づき、拠点を担う人材の育成や技術支援を行う。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 子どもの頃に博物館に行き、モノの面白さを知ることによって、世代を超えて伝わっていくものもあるのではないか。

博物館の基本的な機能（タテ系の機能）



博物館機能のタテ系とヨコ系の概念模式図

5 設置理念を実現するために、まずやらなければならないこと

○ 学芸員等の充実

- ・ 学芸員をはじめ県立博物館の活動を担う人材の育成とレベルの向上をはかり、博物館開館と同時に100%の活動ができる体制を整える。
- ・ 博物館が地域のアイデンティティと密着した施設であることを認識し、実践ができる学芸員を計画的に確保する。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 新博物館を整備する場合、ハードだけではダメであり、それを動かしていく学芸員を減らさず、増やし、レベルを上げることが大事である。
- ・ 博物館のあるべき姿について、美術館・博物館は、インスティテュートであり、単なるファシリティ、施設ではない。研究機能・収蔵技術、学芸員や専門の研究者が多くいてこそ輝く施設であり、人的資源・技術的資源と一体化したものであるということをもっと明確にする必要がある。この記述が今までないということ記録に止めてもらえれば、もっと防波堤になるの

ではないか。インスティテュートであるということの意味をもっと明確にしてほしい。博物館は、地域のアイデンティティ、特性、個性と密着した施設であり、それを確認し理解し、そこから逃げない、流出しない人材によって支えられなければならない。博物館の場合は、移動する学芸員、渡り学芸員のような人たちでは困る。

《櫻井委員の意見書から》

- ・ 専門職としてその位置づけを明確化し、内部的な育成とともに、館外の人材の育成が図れるようにすべき。行政職として勤務先が変わるとかえって館の力が発揮できないのではないか。専門職としては研究・教育・管理運営の資質が求められるが、それら全てに通じた人材であるべきかどうかは慎重に検討が必要であり、実際にその職にある方々の意見は十分に聞くべきだ。

県民参画の促進

- ・ 現在の県立博物館で取り組んでいる「サポートスタッフ」制度の促進をはじめ、県民参画型の取り組みを開館に先駆けて進める。
- ・ 新博物館の整備が、県民の理解を得て、支えてもらいながら進められるよう、PRやプレ博物館活動などの取り組みを行う。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 例えば県民債（1人1万円程度の）を発行する方法もあるであろう。
- ・ 県民全員の総意で、盛り上げられることができるような博物館構想を考えていくとよいのではないかと思う。そうすれば長い目にわたって、21世紀にわたって継続的な運営がやりやすい博物館構想になるのではないか。
- ・ 財源に関して、みんなでお金を出してもらおうという発想は楽しい博物館づくりになるのではないかと思う。本当の県民参画になるのではないか。

6 第3回目以降の部会で検討すべき事項

学芸員等必要なスタッフ体制を構築していくための方策（学校や大学との連携等）

設置場所の考え方

建物構成や規模の考え方

財源、資金等の考え方

組織および運営形態の考え方

- ・ 直営のほか、指定管理者制度、PFIなどの手法について、他の博物館への導入事例の調査を踏まえて、長期的に安定した博物館運営ができる運営形態を検討する。
- ・ 自己評価システムと外部評価システムを導入するなど、絶えず自己革新をはかれる

博物館のあり方を検討する。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 100億円程度であれば、県の起債で対応することもやり方によっては可能であろう。また民間の力を導入するなど知恵を出すことによって、長期的に効率的な運用ができる博物館をつくることもできると思う。
- ・ 例えば県民債（1人1万円程度の）を発行する方法もあるであろう。
- ・ 文化にはお金がかかる。それだけの覚悟が必要である。
- ・ 新しい博物館には、自己革新の機能を入れるべきである。自己評価システムを内部で開発するとともに、外部の評価も導入すべき。

〔参考〕 現状の考察

現県立博物館の現状と課題 ほか

- ・ 施設の老朽化、展示・収蔵環境の不備などから、県立博物館としての機能を果たせていない状況にある。
- ・ 現在地での建替え・増築も土地利用制限から困難な状況にある。

《第1回部会 委員意見》

- ・ 施設の老朽化、収蔵スペース・環境の不備、耐震性能の不備などから、収蔵資料をしっかりと次代に伝えることが困難な状態。
- ・ 現在の県立博物館の収蔵環境では資料が泣いているのではないかと思う。次の世代に文化を伝えていくのが我々の務めである。